
スウィング・モビール

ナオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スウィング・モバイル

【Nコード】

N2869BA

【作者名】

ナオ

【あらすじ】

イケメンだけど、口下手で無愛想。仕事はできるけど、恋愛は大学の苦手。

そんな宏章を誘惑する、小悪魔的美女が現れて……。

ひたすらに妻を愛する男の、おかしくて切ない浮気騒動記。

小説サイトBerry's Cafeで公開・完結した作品と同一内容です。

P r o l o g u e : ラプソディー・イン・ピンク（前書き）

『クロス』の番外編です。独立した作品ですので、これだけでもお読みいただけますが、本編のネタバレになりますのでご注意ください。

Prologue:ラプソディー・イン・ピンク

そのモビールは、満開の桜の下にぽっかり浮かんでいた。
賑やかにパーツをつけ、踊るように揺れながら回っている。

ガオガオレンジャー。

サッカーボール。

愛しい愛美。

小憎らしい颯。

いつもの幸せな家族の風景のオーナメントに、俺は思わず微笑した。

果実のように愛らしい、細長く奇妙な形の風船といったらどうだ。

……風船？ この質感を、どこかで見たような気もするが。

不思議に思いながら、俺はモビールに鈴なりの“それ”に手を伸ばす。

その途端、プシューッと派手に音を立て、風船が次々と空中へ飛び出した。

からかうように、一斉に俺の回りを飛び回っている。

あたふたと“それ”を拾い集める俺は、汗びっしょりだ。

柔らかな女の唇のような花びらが、くすくす笑いながら俺に絡みついて邪魔をする。

あたり一面に舞う、コンドームの風船。

——コンドーム！

? マーブルチョコとソレ

「宏章さん、朝よ。起きて」

妻の愛美が、いつものように俺を揺り起こしている。

さつきから俺の閉じた瞼を照らしているのは、寝室のブラインドの隙間から細く漏れる朝の光だろう。

目を覚ましたいような、このまま夢の続きを見ていたいような、微妙な感覚にとらわれていた。

やけに生々しい桜の花びらの感触が、俺の身体をすっかり反応させている。

愛美をこのままベッドに引き込もうと、目を閉じたまま腕を伸ばした。

ベッドの横に立つ妻の女らしい身体をまさぐる。

今日の愛美は、柔らかい毛皮のスカートをはいているようだ。

……毛皮？

それが二歳五ヶ月の息子の頭だと理解するのが、一瞬遅れた。

「いろあきしゃん。おきて！」

かわす間もなく、颯^{そつ}が俺の腹の上に思いきり飛び乗った。

「うっ！」

思い切り鳩尾をやられて、うめき声が漏れる。

慌てて布団を剥がして飛び起きると、颯が俺の上から転げ落ち、ベッドの足もとまでくると転がるのが見えた。

「またお前か、颯!」

幸せな目覚めをぶち壊された怒りで、俺は颯に怒鳴った。

「何度言ったら、寝ている俺の上に飛び乗るのをやめるんだ! いか、俺はプロレスラーの親父になったわけじゃないんだぞ!」

「颯、ぶおえしゅーじゃないもん。ガオガオエンジャーもん!」

ピーナツバターでベトベトの口を尖らせて、小さな颯が抗議した。

水色のパジャマの中では、ガオガオレンジャーが一面に戦いを繰り広げている。

赤みを帯びた柔らかい髪が、静電気であらゆる方向に立ち上がっていた。

まるで、鳥の雛だ。

「やかましい! だいたい、俺の名前はイロアキじゃないぞ。変態みたいな呼びかたをするな」

愛美を抱き損ねた俺は、すっかり不機嫌だった。

まったくこいつときたら、油断も隙もない。

はじけそうな笑顔を浮かべた颯がベッドによじ登り、じゃれつく猫のように俺に抱きついた。

「パパ!」

子ども特有の、甘酸っぱい匂い。

「颯、ガオガオえつどね。パパ、にんそうわるもの」

「悪者に人相をくつつけるな。いいから、俺の顔の前からどけ」

「やだもん。颯、パパと遊ぶもん」

「言うことを聞かないヤツはこうだぞ」

俺にべつたりと張り付く颯のわき腹を、これでもかたくすぐってやる。

きゃあと笑いながら颯が身を振り、ようやく視界が開けた。

サイドボードの上に置かれた時計で時間を確認する。

十二時。昼じゃないか。

一瞬会社に行き送れたかと青ざめたが、数ヶ月ぶりに休みを取っていたことを思い出して胸をなでおろした。

こんな時間に、俺が家にいるのがたまらなく嬉しい颯は、上機嫌だ。

すでにサッカーボールを用意して、俺に期待を込めた目を向けている。

「また買ってもらったのか」

颯が小さな手で抱えているのは、見たことのない新しいボールだった。

ナイキのエアロ。

二歳の子どものおもちゃに与えるようなもんじゃない。胸の中に妙なもやもやが沸く。

すっかりものの愛美が、ここのところ、やけにおもちゃを買い与

えているのが気になっていた。

子ども部屋は、最新の高価なおもちゃで溢れかえりそうだ。

物を買えば与えすぎるのはどうかと思うが、ここまで仕事漬けの親父じゃあ、しかたがないのかもしれない。

颯が生まれてから、うちはほとんど母子家庭だったからだ。

俺はもともフリーのシステムエンジニアで、大学在学中に一人で立ち上げた会社を、大きくすることに懸命だった。

それは、物質的に恵まれた実家を捨てて独り立ちした自分のプライドのためというより、同棲時代に貧しい生活で苦勞をかけた最愛の妻への、不器用な俺なりの愛情表現だった。

何一つ持たずに人生をスタートさせた俺を、どんな時でも支え続けてくれた、愛情深く、忍耐強い妻。

俺たちは、お互い、幸せな家族のひな形を知らずに育った。

家族の絆に恵まれなかった俺は、俺以上に辛い子ども時代を過ごした愛美を、誰よりも幸せにしたかったのだ。

睡眠時間を切りつめて大量の仕事を一人でこなし、作り上げたシステムを企業に売り込む。

口べたで嘘をつけない俺の性格が災いし、最初は困難を極めた契約も、年月を重ねるに連れ、むしろ信頼を勝ち得る手段となった。

目指す方向が時流の流れに合致して、気が付くと、立ち上げた小さな会社は、驚くほど大きくなっていった。

電気すら滞りがちなアパートの一室から始まった会社は、何度か移転を繰り返し、現在は都心のビルの一角にある。

会社の運営が軌道に乗り始めてからも、一度転がり始めた俺の仕事中毒はとまらなかった。

仮眠室で連日夜を明かすこともしょっちゅうで、去年、新築したこの家の昼の姿を、いまだまともに見たこともないというありさま

だ。

颯が俺を忘れないのは、愛美の努力の賜物だと思う。

サイドボードの上に飾られた、三人の写真。

家族で過ごした思い出には愛美の言葉が添えられ、いつでも取り出せるようにアルバムに綺麗に収められている。

颯は、毎日愛美にそれを見せてとねだるらしい。

だから、ごくたまにこうして家でこいつと顔をあわせると、颯は文字通り静電気を起こした毛糸玉になって俺に張り付く。

我が家の前を通る女子高生に大人気の、赤い髪と黒目がちの大きな目をした小悪魔。

もつとも、今は口のまわりにはみ出した好物のピーナッツバターで、その顔も台無しだが。

瓶から指ですくって食べたらしい。

愛美が見過ごしているとは、珍しいことだ。

暴れる息子を片手で押さえ、口と手をティッシュで拭ってやりながら、俺は聞いた。

「愛美は？」

俺は、妻を今でも名前で呼ぶ。

それは、颯の母であるまえに自分の妻であって欲しいという、男のガキっぽい意地だった。

「ママ、いないの」

「家にいないのか？」

颯がこくと頷く。

買い物にでも行ってるのだろうか。

こんな時間まで颯をパジャマのまま放っておくなど、今までに一

度もなかった。

俺が目覚める頃にいないのも。

嫌な胸騒ぎがする。

ベッドから降りようとしたら、いつもと高さ違っていてバランスを崩し、俺はフローリングの床の上に、派手に転がり落ちた。

冷たい床に、蛙みたいに張り付いた俺。

なんてザマだ。

「わーい！ パパ負け！ 颯のかち！」

小悪魔が背中に馬乗りになり、べたつく手で俺の髪を掴んで勝ちどきを上げている。

「痛つてえ……」

身体を動かしたら、頭の芯がズキズキと割れるように痛んだ。

自分が、まだ会社帰りの服装のままだということに気がつく。

さすがにジャケットは脱いでいるが、それ以外は、腕時計まで身につけたままだ。

あたりを見渡して、ますます妙な気分になる。

ベッドの高さが違うと思ったら、ここは客室じゃないか。

何でこんなところで寝てたんだっけ。

サイドテーブルの上に、俺が空けたと思われるブランデーのビンが倒れている。

すると、この頭痛は二日酔いか。

そうだ、昨日は久しぶりに、親友の伶と二人で飲みに行ったのだ。朝方ようやく帰ってきて、心配して起きて来た愛美がいつものように優しく俺のジャケットを脱がせて……。

その時、プシューツと音がして、部屋の中を細長い風船が勢いよく飛びまわった。

颯が膨らませたらしい。

見覚えがあるような、ないような……。

「パパ、見て！ ふうしえん。ぶーん」

「うわあっ！」

思わず叫んでいた。

あの夢の光景だ！

あたたする俺の周りを、からかうように飛び回るソレ。

コンドームの風船が、ぐんと高度を上げて天井にぶつかり、しゅうつと萎えて床にぽとりと落ちる。

それを見た瞬間、全てを思い出した。

昨日の夜の行動を。

いまわの際に、走馬灯のように記憶が脳裏を巡るといつのがこれか。

緊張に顔を強ばらせながら颯に聞く。

「この風船、どこにあった？」

「あっちおへや。おてがみいっしょ」

颯が指をさす先に、白い紙飛行機もどきが落ちている。

息子を背中にくっつけたままそろそろと這って近づき、こわこわ広げてみる。

それは便箋に女らしい綺麗な字で書かれたメモ書きだった。

”しばらく戻りません。颯をお願いします。　　愛美”

「まずい……」

俺は床に座り込み、うめき声を上げた。

まさかこんなことになるなんて。

うかつだった。

なんでアレを持ち帰ったんだ。

昨日、帰り際にジャケットをはおり、車のキーをポケットから取り出したときには、他に何も入っていない気がしていたのに。

リビングのテーブルの上に、愛美があのままアレの箱を置いていたんだな……。

書き置きがその横にあったというところに、愛美の猛烈な怒りを感じる。

俺はがっくりとうなだれた。

愛美……。そこまで怒ってたのか……。お前でも怒ることがあるんだな……。

いや、当然だな。怒るに決まってる。妻だったら誰だって怒るよな。こんなものが、朝帰りの夫の服のポケットから出てきちゃな……。

しかも、医者から、二度目の妊娠をする可能性がほとんどないと言われている愛美と俺の間では、まったく不要なものときてる。

見つかった時には、焦りまくって、とっさの言い訳すら出てこなかった。

——ここには四個しかないけど、こういつのつて十二個入っているものなの？

愛美に落ち着いて聞かれて慌てて首を振り、それは五個入りの箱

だよと即答した自分の間抜けぶりが情けない。

五引く四は一。

箱からひとつ減ってるのを証明してどうする。

小学一年の引き算だ。いや、幼稚園児でもわかるだろ。張り切って八個も使ったと思われたくないばかりに。

一晩で八回はもう無理だよ、愛美。俺も中坊じゃない。たった一個じゃないか。

頭の中で苦しい弁解をしつつ、頭を掻きむしった。たった一個。

「回数以前の問題だよな。そりゃそうだ」

床を見ると、颯が箱から取り出して床に綺麗に並べた、コンドームと、ガオガオレンジャーのミニフィギュアと、マールチョコが、一個置きに並んで円を描いていた。

色とバランスは見事なものだ。

中心に、マールチョコの筒が立っているのが前衛的だな。

こいつは、愛美に似て芸術的才能があるらしい。

「偉いぞ。綺麗に並べたな……。ああ、よこせ、颯。それはゴムだ。ゴムじゃない。食ってもうまくないぞ」

いつそ俺が食っておけばよかった。

そうすれば、愛美に何も知られないまま終わったかもしれないのに。

足元には、すっかりしおれてのびきったコンドームが、情けなく床に張り付いている。

まさに、今の俺だ。

俺は大きいため息をつきながら、颯の小さな手から未開封のそれ

を取り上げた。

残りの包みも拾い上げると、全部ぐしゃっと丸めてゴミ箱に捨てる。

愛美に見えるように捨てるのが肝心だ。

見えないところに捨てたら、また疑いをかけられる。

「パパ、颯の街こわした。パパかいじゅう！」

颯がせっかくの芸術作品を壊されて、ブーブー文句を言っている。

「しかし、いつこれをポケットに入れたのか、記憶がない……」

証拠物件を持ち帰って自分の首を絞めるくらいなら、いつそ本能のままに全部使い切っておけばよかったかもしれない。

据え膳たらふく食わぬは男の恥って言うじゃないか。たらふくは余計か。

床に転がっていた携帯を取り上げ、着信を見る。

当然のことながら、愛美からの連絡も、メールもなかった。

すぐに連絡を取りかけて思いとどまり、ため息について携帯をテーブルに置く。

家を出て行った愛美に、今電話をかけてどうなる？

ますます嫌気をさされるだけだ。

重い身体を引き上げて、颯にガオガオレンジヤーのDVDを見せ、とぼとぼと風呂場に向かった。

熱いシャワーを浴びながら、ぶつぶつと愛美への言い訳をシミュレーションする。

「仕方なかったんだ。そうしなきゃならなかったんだよ。愛美のほかに抱きたい女なんか一人もないんだ。信じてくれ」

いや違う。それじゃあ、俺はただの卑怯者だ。
風呂場の壁にごつんと頭を打ち付ける。

「俺がそうしたかったんだ。どうしてもそうしたくて……」

この言い方は、もつとだめだ。

「愛美が思ってるほどのことじゃないんだよ。つまりソレをつける必要が……」

だめだだめだだめだ！

「ああもつ、いったいどうしたらいいんだ」

頼むから、愛美。しばらく好きところで、気が済むまで遊んでくれていいから。

だからどうか、お互い様にしましょうなんて思わないでくれ。

愛美がどれだけ男の注目を集めるかを、昔から、嫌というほど知っていた。

颯を産んでからの愛美は、ますます美しくたおやかになり、まるで甘く優しい芳香を放つ水蜜桃のようだ。

愛美には何か男を癒す雰囲気があつて、男はまるで甘い蜜を湛えた大輪の花の中で一休みしようとする蜜蜂のように、ふらふらと引き寄せられる。

愛美が見知らぬ男に誘われている様子がまざまざと目に浮かんでいてもたつてもいられない。

思わず壁に取りすがる。

畜生、愛美に手を出しやがったらどんな男でもぶつ殺す！

絶対にぶつ殺すぞ！

「よし。……何もなかった。これでいこう」

俺はザアザアと頭からシャワーを浴びつつ、決心した。

その現場に乗り込まれても、最後まで絶対に認めるなとよく言うじゃないか。

「何もなかった。何もないぞ」

自分を懸命に鼓舞しながらも、落ち込む気持ちをどうすることもできなかった。

ほとんど家に帰らない上に、たまに帰ればこのざまだ。

愛美は間違いなく、俺に愛想を尽かしただろう。

もしも、言い訳する機会すらも与えてもらえなかったら。

水栓のレバーをひねり、ぽたぽた落ちる水滴を見つめていると、風呂場に突然電話の音が鳴り響いた。

しきりのガラスドアを取り壊す勢いで開け、洗面台の横の壁に取り付けられた電話を掴み取る。

「もしもし！」

何も聞こえない。

相手の気配を感じるだけだ。

受話器を持つ手に力が籠る。

「もしもし！ 愛美か？」

電話は無言のまま、プツリと切れた。

すぐにナンバーを確認する。

非通知だった。

ここ数ヶ月のうちに、何回か、こうして無言電話を取っていたことを、今さらのように思い出す。

電話は、俺が出ると切れるのだった。

不在がちな俺がとるくらいの電話なら、実際はもっと頻繁にかかってきているのではないか。

知らない相手からの無言電話が続いていたら、愛美も俺に相談するはずだ。

愛美は、何も言わない。

恐らく、知っている相手なのだ。

そういえば、愛美の携帯が鳴っていたとき、取り上げるのを躊躇したことがあった。

俺の様子を伺うように、愛美が声を潜めるのを見たこともある。知られたくない内容……それとも、知られたくない相手だったのだろうか。

愛美を信じていたから、気にもとめなかった。

いったい誰から電話がかかってきているのだろう。

その時、またベルが鳴り、心臓が止まりかける。

非通知。

強張った指でようやく受話器をとり、耳に押し当てる。

しばらく間を置いて、男の声がした。

『霧島か？ まだ家にいたんだな。俺だよ。昨日は誘ってもらったのに、行けなくてすまん』

身体から、急に力が抜ける。

高校のときから付き合いがある松岡だ。

所属していた高校のサッカー部の試合を通して先に伶が知り合い、それから時々一緒に飲むようになった。

昔から付き合い下手な俺の交友関係は、幼なじみで親友の伶を通

して築かれていると言ってもいいほどだった。

「何だ、お前か。家に連絡をよこすなんて珍しいな。驚かすなよ。どこから掛けてるんだ？」

松岡は、一瞬躊躇してから答えた。

『外にいるんだ。昨夜から携帯の電池切れで』

電池切れ？

引っかかるモノはあったが、なんとか気を取り直して言葉を続ける。

「調子はどうだ？ スポーツニユースはネットでチェックしてるんだが、最近はテレビの試合も見れなくて」

『相変わらず、仕事の虫だな。俺は怪我が治ってようやくサテから復帰。工藤は移籍先で、いい仕事をしているよ』

サッカーを追いつける人生を選んだ松岡や工藤を見ると、今でも胸の奥が鈍く疼く。

もし、膝を痛めずにいたら、俺にもそんな人生があっただろうか。

特に、颯にとってのサッカー選手が、ガオガオレンジャーなみのヒーローなのだと知ってから。

松岡の落ち着いた低い声が、受話器の向こうから聞こえる。

『もう昼だぞ。天気もいい。たまには、颯を連れて遊びに出てやれよ』

「ああ、そうだな……。そうするよ。工藤にもよろしく言うておいてくれ」

俺たちは、短い会話を交わして電話を切った。

なんとなく、不自然な会話だった。

電話が切れた後も、俺は受話器を握り締めたまま、ぼんやりと立ち尽くしていた。

水滴が身体を冷やし始めたことによりやく気づいて、バスタオルを手に取る。

拭い去れない不安。

松岡は、なぜ俺が家にいることを知っていたのだろう。

頭の中に、いつか工藤が口を滑らせた言葉が浮かんで離れなかった。

——松岡さんは愛美さんみたいなひとが、理想なんですよね。

今さらのように、松岡が初対面の愛美に向けていた、眩しそうな視線を思い出す。

今まで、どうしてそれを心配せずにいられたのだろう。

もちろん、奴に限らず、愛美を好む男はたくさんいるのだ。

たとえば、伶はどうだ？

忙しい俺に代わって伶が愛美を連れ出してくれることに、いつも感謝していた。

二人の間になにかがあっても、俺は気が付きもしないだろう。

日常の小さな出来事が突然ひとつの方向を指差した気がして、心臓が激しく音を立て始めた。

家庭を顧みず、仕事だけに没頭する夫。

愛美が寂しさを埋めて欲しいと思うなら、それを叶えたいと願う男は五万というだろう。

自分がこうして愛想を尽かされるまで、愛美が他の男に興味を持

つ可能性など考えたこともなかった。

だが、たとえそうであっても、俺にはもう、愛美を引き留める権利などない。

昨日の夜のことを、まざまざと思い出していた。

理由はどうであれ、あれは俺にひたすら愛を与え続けてくれた愛美に対する裏切り行為だ。

もし、愛美がこのまま二度と俺のもとに戻ってこなかったら――。それ以上何も考えられなくなり、俺はただうなだれて、身体から流れ落ちる水滴を見つめていた。

？シャンパンゴールドの泡

「狙われてるぞ。気をつけろよ、宏章」

伶が水割りのグラスを傾けながら俺を見て、意味ありげにやつと笑った。

六本木にある、裏では有名な会員制クラブで飲んでいた。と言つても、変なところじゃない。

リラックスできる、隠れ家的クラブとでも言ったらいいのか。

ここは余計な女も付かないし、客のプライバシーを侵害するようなことが一切ないよう躡けられたスタッフが、控えめで完璧な応対をするので気に入っていた。

メディアで知った顔があちこちの席に見えるが、お互いに誰を同伴しようが、どんな飲み方をしようが、干渉しないのが暗黙のルールだった。

珍しく伶に早い時間から呼び出され、ここに座ってから二時間。すでにかなりの量を飲んでいる。

強がつて飲んではいたが、まだまだ素面のこいつと違って、俺はけっこうヤバくなり始めてた。

俺も酒はそれなりに飲めるほうだが、伶の強さは尋常じゃない。そろそろ引き上げないと、この間のシンガポールのように、また二日酔いにさせられちまう。

幼馴染で同い年の伶は、人付き合いがとことん下手な俺と違い、すぐに人を惹きつける磁石のような魅力を持った男だ。

一人っ子の俺には、親友とも兄弟ともいえる奴で、ガキの頃から俺の人生の思い出には、よくも悪くもほとんどこいつが絡んでいる。虫みたいにうごめいていた赤ん坊の頃から数えれば、三十年近い

付き合いだ。

たまに女の影が見えるが、結婚する気配も見せないのは、何から何まで自分でやれる奴だからだろう。

愛美がいないと靴下のありかもわからない俺と違い、こいつは料理から身に着けるもののセレクトまで、持ち前のセンスで楽々こなす。

一人で完璧に人生を楽しめるようにできているのだ。

俺をからかうのを生きがいにしてるような伶は、時々こうして俺をとことん酔わせることがある。

そういう時には、大抵、この人を食ったような笑顔の下で、何かよからぬことを考えているのだ。

酔いが回った頭で伶の目線の先を追うと、そこにはどこかで見たような若い女が、一人カウンターで飲んでいた。

二十代の半ばほどだろうか。

こちらに視線を投げかけながら、透き通ったシャンパンのグラスを傾けている。

「狙われてる？ どういう意味だ？」

俺は、伶が何を言っているのか把握できずに聞き返した。

「文字通りだよ。お前は昔から、本当にこの手のことについていな」

「悪かったな」

くすくす笑う伶にむつとして、グラスの酒を煽った。

「愛美とは何年になるかな」

伶に聞かれ、俺は答えた。

「知り合って十二年。結婚してから、三年半になる」

愛美に会ったのは、まだ青い、ふて腐れたガキの頃だ。

金と名誉はあっても崩壊した家庭に育った俺が、人生の目標を作り、こうしてなんとかまともになれたのも、愛美がいたからだ。

「この間、週刊誌でお前の記事を見たよ、宏章。IT界の次世代大注目株だな」

「その話はやめてくれ。経済の話が数行で、あとは女性関係のゴシップばかりだ。あそこに書かれた女の話なんか、どれも嘘ばかりで根も葉もない。絶縁して十年の親父の名前に、いまだ引きずられて取りざたされるのにはうんざりだ」

俺はそう言って、伶の話を強引に打ち切った。

俺の仕事が順調に成功した理由の一つに、内閣の要職にある親父の名前もあることを、絶対に認めたくはなかったのだ。

「ムキになるなよ。女の方も、売名だマスコミは宣伝の手段にして、適当に流しておけばいい」

「俺にとって、愛美以外の女は時間の無駄だ」

「だろうな。だから困る」

伶が不思議なことを言い、小さく笑った。
珍しく物憂げな表情だ。

「何がだ？」

「別に。いろいろとな」

しばらく黙って俺を見ていた伶が、突然言った。

「桜が留学先から帰って来てる」

「桜？　へえ。懐かしいな。廃棄寸前のボロビルに事務所を置いていた頃は、学校帰りに毎日遊びに来ていたんだ」

桜は身内の少ない伶の、ただひとりの従兄妹で、まるで宝物のよう
に大切にされていた。

三年前から、ヨーロッパのどこかに留学をしていたはずだ。

桜は音楽家で世界中を回っている両親の代わりに、ずっと伶の祖
父母の家に引き取られて暮らしていたから、家が近所でしょっちゅ
う顔を合わせていた俺にとっても、妹のような存在だった。

俺は桜を思い出しながら言った。

「あの桜が、もう二十歳になるなんて信じられないな。三年半前の
例の家出事件の時には、まだ子どももいいとこだった」

桜が高校一年の時、突然家出して大騒ぎになったことがあった。

あいつは俺の携帯に電話をかけてきて、どこにいるかも言わず、
宏章さんが探してくれなきゃ帰らないと泣いた。

俺はちよと結婚前で、ぎっしり詰まっていた仕事の予定を全部
キャンセルして桜を探したのだ。

桜は軽井沢の別荘の前で、中に入れず泣きじゃくっていた。
少女の頃、何度も泊まりに連れていった俺の実家の別荘だ。
月明かりに照らし出された長い髪と、桜の華奢な肩。

「なぜ桜がそこにいると思ったのか、今でもわからん。大体なんであいつはあんな騒ぎを起こしたんだろうな？ 理由を聞いても何も言わないんだ。迎えに行つた時は、喜んで泣きながら抱きついてきたのに、帰り道の車の中では窓の外を見たまま一言もしゃべらなくて途方にくれたよ。見ると目に涙をいっばいためてる。あの時ほど女の子がわからんと思ったことはない」

俺の言葉に伶が苦笑した。

「お前以外は、誰が見てもわかる状況だったろうよ」

「どういう意味だよ。どうせ俺は、颯にすら振り回されるくらい子どもの扱いに慣れてないからな」

「だいたい、こうも酔いが回っては、冷静に何かを考えるのはとても無理だ。」

伶はテーブルに肘を着いて組んだ両手に端整な顔を乗せ、何かを考えるよう言つた。

「せめて俺が日本にいるときだったらと思う。当時はフランスで研修医をしてたから」

「俺が迎えに行っちゃだめだったってことか？」

「お前以外の誰が行くんだ」

伶には何か気に掛けていることがあるのだという気がしたが、話していいなら口に出すはずだ。

「まあともかく、過ぎてしまったことだ。なあ、宏章。俺は桜が可愛いんだよ。俺も、俺の兄貴も。目の中に入れても痛くないくらいに」

伶はそう言うと、グラスに目線を落とした。

ライトの加減が、いつも快活な伶の表情が、暗く沈んで見える。

「わかってるさ。俺だって桜は可愛い」

伶は顔を上げて俺を見ると、静かに続けた。

「宏章。お前は今、幸せだ。揺るぎなく。今なら戻せる。お前を信じてる」

俺は、頭を振りながらため息をついた。

「アルコールが抜けたら、今日の話の要点を箇条書きにして俺に渡してくれよ、伶。重要事項にはアンダーラインだ。お前のためならなんでも力になりたいが、話の糸口がまったく掴めない」

「今はそれでいいんだ。気にするな……」

伶がまたグラスを開けたから、意地になって俺ももう一杯飲み干した。

頭がふらつき始めた。

談笑する客の声に、エコーがかかって聞こえる。

「しかし面白い男だよな、宏章。仕事にはあれだけ勘が働くのに、そういうところは相変わらずまっただめだ。まるで学生時代のお前の成績表みたいじゃないか。ほかは完璧なのに、ひとつだけ見事

に抜け落ちてる」

伶が微笑し、俺は思わず赤くなった。

「どうせ俺は壊滅的に絵が下手だよ」

そう、勉強もスポーツも何でもやれた。

少なくとも、努力できる教科はトップになれる。

だが、絵だけはどうにもならず、美術の時間が拷問だった。

高校で選択授業になったときには、もう描かなくていいんだと、踊りだしそうになったくらいだ。

「いや、いい絵だったよ」

伶が真面目な顔でそう言った。

「どこが。いつも美術の成績は1だったのを知ってるくせに、よく言うよな」

「いつもの教師が産休で、一学期間、他の美術教師が来てたときは評価がよかつたろ？」

「まあな。多分数字の入力ミスだ」

この話題は、もっとも避けたいことの一つに入る。

「わからん奴にはわからないんだよ。わかる奴にはわかる」

伶は昔を思い出すように、微笑んで言った。

「お前の絵が好きだったよ。見てると和む」

つまり、吹き出したくなるような絵を描くと言いたいわけだなと文句を言いかけたとき、俺達のテーブルの横に、ふわりと白い影が立った。

顔を上げると、カウンターにいたさっきの女が、俺を見下ろして悠然と微笑んでいる。

「ご一緒していいかしら」

おそらく、かなり綺麗な女なのだろう。

俺にすら、際立って洗練された女だということは見て取れる。回りの男達が、ルールを犯してちらちらとこっちを見ている。

中には目を離せずに、あからさまにうつとりと見つめてる奴もいた。

さらりとした知的なストレートのショートカットの髪と、女らしい曲線を描いた身体を見せ付けるかのようにまとった薄いシャンパンゴールドのワンピースの対比が面白いと思う。

むき出しのほっそりした腕には、いくつかの繊細な金のブレスレット。

白磁の陶器のような肌を引き立てる、黒く長い睫と赤い唇。

挑戦的に俺を見る切れ長の大きな目が、美しい猫を想像させる。

俺は立ち上がると、女を見て言った。

「どうぞ。俺は今帰るところなので」

一瞬、傷ついたような表情に見えたが気のせいかな。

それとも昔そんな事があったのを思い出してるだけかもしれない。

……思い出してる？ 何を？

俺は、自問自答した。

大体、昔っていつのことだ。
相当酔ってるな。

「邪魔者は消えるよ。ゆっくり楽しんでくれ」

伶は女にもてる奴だから、一緒にいると、こういうことがよくあるのだ。

「宏章」

伶がため息をつき、あきれた顔で俺を見た。
だが、それ以上は何も言わない。
なんだよ、お前が気に入るような女じゃないか。

女は俺の前に立ったまま、大きな目で俺を見上げている。
なんでそんなにじっと見てるんだ。

「じゃあ伶、お先に」

女の横をすり抜け、テーブルを離れた。
すれ違ったウェイターに、あの席の会計を全部俺に回しておいてくれと言い、そのまま店を出る。

時計を見ると十時になるところだ。

今日から四月に入ったとはいえ、夜の風はまだ冷たい。
手に持ったジャケットをはおり、坂道をゆっくりと歩く。
細い路地から表どおりに出ると、ライトアップされた桜がぼうつと浮き上がって見えた。

今年は例年より随分気温が低い日が続いたせいで開花が遅れ、桜並木は多少散りかけてはいるものの、まだまだ見事なものだった。
なかなかタクシーが捕まらないのは桜のせいかな。

？金のサンダル、銀のしずく

これ以上歩くのも面倒になり、道端のビルの階段に腰を下ろした。携帯を取り出し、家のナンバーを押す。

『宏章さん？』

電話の向こうから、愛美の柔らかく、穏やかな声が聞こえた。

『お仕事お疲れさま。まだ会社にいるの？』

「伶と飲んだ。これから帰る。颯は？」

『ぐっすり寝てるわ。今日は久しぶりに天気がよかったから、一日中お友達と公園で遊んだのよ。お夕飯を食べているうちに眠っちゃったの。椅子に座ったままクラクラして、おでこにソースがついても目が覚めないのよ。可愛くて、動画を撮っちゃったわ。後で見てね』

愛美が思い出すように、くすくすと笑った。

「もちろん。帰るのが楽しみだ」

笑って電話を切った後、帰って久しぶりに愛美を抱く瞬間を想像して、うつとりとなった。

明日は久々に休みを取った。
時間を気にすることもない。

妻にメロメロな男を、世間はまるで変わり者のように言う。

甲斐性は、外の女に發揮して褒められるものらしい。

だが、俺にとってはつまらん世間の冷やかしなどどうでもよかった。

人は人、俺は俺だ。

何で一人の女に飽きないのかなんて、俺にもわからない。

愛美を抱いている時は、他の女では味わえない幸福感で満される。

愛美は俺の愛しい女であり、最愛の妻であり、家族の絆をほとんど知らずに育った俺にとっては、帰る場所そのものといえた。

俺は幸せな気持ちのまま、携帯を見つめていた。

どうせ周りの奴の失笑を買っているのだろうが、待ち受けは颯の写真だった。

さすがに、愛美の写真を入れるのは照れる。

その時、女の声がした。

「もう、すっかり腑抜けね。爪を抜かれた飼猫みたい」

ムカついて声の主を見上げる。

俺を皮肉な笑いで見下ろしているのは、さつきクラブで会ったあの女だった。

俺は、何も言わずに、そのまま女を見つめ返した。

携帯を内ポケットにしまうと、一切の感情のこもらない声で、俺は言った。

「今夜の相手を探してるなら他を当たれよ。悪いが、あんたを買うほど俺は物好きじゃない」

女が少しひるんだのがわかった。

思ったより擦れた女ではないのかもしれない。

「私が怖いのか？ それとも奥様以外の女が怖いのか？」

こいつは、俺を怒らせたくてたまらないようだな。

俺は階段からゆっくり立ち上がると、女を間近から見下ろした。

無言のまま、冷たく女を見つめる。

だが、女は目をそらさなかった。

生意気そうな、綺麗な顔をしている。

よく見ると思ったよりもずっと若い。

二十、いや、もっと若いくらいかもしれない。

その可憐な顔に似合わぬ挑戦的な態度に、強く興味を惹かれたことは確かだ。

生意気なこの女をねじ伏せてやったら、さぞ面白いだろう。

だが、挑発に乗って貴重な時間を潰すつもりはない。

「いい度胸だな。男漁りの小娘にしては上出来だ。褒めてやるから、さっさと子ども部屋に帰れ」

一瞥をくれて女に背を向け、道を歩き出したとたん、女が叫んだ。

「もう、小娘なんかじゃないわ！」

無視して足を進める。

せっかくの気分を台無しにされ、酔いが一気に冷めるほど腹が立っていた。

タクシーが捕まらないなら、歩いて帰ればいい。

「こっちを向いてよ。ここで証拠を見せるから！」

俺の横をすれ違って行つた三人組の酔っ払いが、口笛を吹いたの

が聞こえる。

「うひゃあ！ お姉ちゃん、すげえ。ここで脱いでくれんの？」

いったい何をやらかしてるんだ。

公開レイプでもされようってつもりか。

俺はため息をつくと足を止め、うんざりして後ろを振り返った。

女は俺を見つめたまま、ワンピースの細い肩紐を滑らせているところだった。

はやし立てる男達と、立ち止まった通行人達の驚いた顔。

その瞬間、昔の記憶の断片が脳裏をよぎる。

誰もいない別荘。

振り返る俺の目に映った白い肌。

思い出したとたん、身体が反応していた。

ジャケットを脱ぎながら、急いで女に駆け寄る。

「桜！」

ワンピースが滑り落ちる瞬間、俺は間一髪で桜の身体をジャケットに包み込んだ。

そのまま男達の視線から遮るように抱きしめる。

「桜……。お前、何やってるんだ……。馬鹿なことを……」

ほっそりしたしなやかな身体が、俺の腕の中で震えていた。

顔を見ると、大きな黒目がちの目にいっぱい涙が浮かんでいる。

さっきまでの生意気そうな表情は、今や全て消えていた。

大人ぶって、精一杯虚勢を張っていたのだろう。

「気がついてくれないんだもの……。宏章さん、全然気がついてくれないから……」

あの時と同じように、涙が零れ落ちた。

桜は、白い指先で、次々と目に浮かぶ涙を抑えている。
赤く染めた爪が痛々しくすら感じた。

「すまない」

俺は泣き出した桜を抱きしめたまま、子どもをあやすように髪を撫でながら謝った。

まるで時間を巻き戻したかのような。

「酔ってたんだよ。化粧してるのも、こんなに髪が短いのも初めて見たんだ。それにお前がその、あんまり成長したもんだから」

この言い方は絶対変だ。

あの頃よりほっそりしたくらいなのだから。

俺のシャツを通して桜の柔らかな胸の膨らみをはつきり感じていた。

「ほんとうに、成長して……」

いったい俺は、何を言ってるんだ。

ふと、見物人が全員ニヤニヤと俺達を見ているのに気がついた。
俺は過去の経験から、この場合にもっともふさわしい表情を脳内で検索し、その通りの顔で野次馬達に向かって低い声で言った。

「見世物じゃない。さっさと消えろ」

顔色を変えた野次馬どもは、何も見なかったように一瞬で散っていった。

自分の人相の悪さも、こんな時にはありがたい。

ジャケットで何とか桜の身体を覆い隠しながら、綺麗なゴールドの華奢なサンダルを履いた足元にたまっている、薄く柔らかな布を引き上げる。

元通りに身体を包み、その上からジャケットを着せ掛けてきつちりボタンを掛けると、ようやくほっとして俺は言った。

「おかげですっかり酔いが冷めたよ。一緒に、伶の所に戻ろう」

桜だとわかったからには、こんな格好で外においておくわけにはいかない。

だが桜は、俺の言葉に小さく首を振った。

また涙が零れる。

桜の涙を止めようと俺は必死になった。

「じゃあ、家まで送ってやる。タクシーを」

桜が目を伏せたまま横に首を振る。

「タクシーは嫌か？　じゃあ、俺の車ならどうだ？」

今度はこくと頷いた。

「わかった。会社はすぐそこなんだ。運転手と呼ぶよ。そこまで一緒に歩けるか？」

「歩けない」

桜がぐすぐす鼻をすすりながら言った。

「サンダルで足が痛いの」

見ると、赤いペディキュアをした白い足は、細い皮ひもに擦れて痛々しく皮がむけていた。

急いで俺を追っただけでこうなるとは、女のサンダルはなんて非実用的な代物なんだ。

こんなに柔らかい肌に、細い皮ひもだけで支えるヒールの高い靴を考える奴はサドじゃないのか。

こうなるとおぶうか抱くかのどちらかしかないが、おぶった場合は後ろからまた酔っ払いどもが桜を見てはやし立てることになる。背に腹は返られない。

俺は桜を横抱きに抱え上げて言った。

「落ちないように、しっかり俺の首につかまってろ」

「うん」

桜は嬉しそうに頷き、まだ頬に涙がついたままにつこり笑って俺の首に腕を回した。

まったく。

俺はどうも昔から、こいつの涙と笑顔のダブル攻撃に振り回されるんだ。

「そんなに嬉しそうな顔するな。見てる奴が変に思うだろ」

道行く奴らが振り返ってくすくす笑う中を、俺は会社に向かって黙々と歩き始めた。

車までの辛抱だ。

この小悪魔を、家に送り届ければ開放される。

「素敵。花嫁さんみたい。ねえ、宏章さん、白い花束買って」

「今の時間にあいてる花屋があるわけない」

「じゃあ、あつたら買ってくれるの？」

「あつたらな」

「一つください」

桜が道端の親父に声をかけた。

満開の桜に浮かれたカップル用に、花束を売ってる出店がありやがった。

ビルの壁に寄りかかり、ぽかりと煙草の輪っかを吹き出していた親父が、俺達に目を向けにやりと笑う。

「いくらだ」

「五千円。最後の一個だから四千円でいいよ」

親父が楽しそうに顔をゆがませて言った。

何がそんなに面白いんだ。

カップルなんか、街中に溢れてるだろう。

「ん？ どっかであんたの写真を見た気がする。どこだっけかなあ」

親父が首をかしげた。

「指名手配写真だよ」

俺がむつつりと答えると、親父が一瞬、真顔でビビった。
桜がクスクスと笑うのを見て、ようやくホッとしてやがる。

桜を抱いたまま、財布から金を取り出すのに四苦八苦した。
桜が下に降りたくないとしっかり俺の首につかまってるからだ。
これは、俺の日常生活の何かに似ている気がしてならない。

静電気を起こした毛糸球のように俺に張り付く、黒い大きな目の
小悪魔。

「しっかしまあ、一時たりとも離れてらんねえんだな。俺までなん
かこう、カーツと熱くなるわなあ」

親父がやけに感心して言いながら、大喜びの桜に白い花で作られ
た花束を渡し、受け取った金をグレーのジャンパーのポケットにね
じ込んだ。

「ああ、熱いね。焦げそうだ」

三年ぶりに会ったとたん、またもやわがまま娘に振り回されて、
俺の頭からは怒りの熱い湯気が立ち上りそうだった。

「しかしあんた、人前で彼女にチュウするようなタイプのナンパ男
にや見えねえがな」

「その通りだよ。よくわかるな」

ニヤニヤと俺を見るごま塩頭の親父に、ぶっきらぼうに答えた。
第一、人前であろうがなかるうが、子ども相手にそんな気が起きるか。

伶がいつも甘やかすせいだ。

伶だけじゃない、伶の兄貴も、こいつにかかわってるみんなもそうだ。

なんでもっと厳しく接しないんだ？

わがままなんか、無視すればいいだけだ。

そんな笑顔は俺には通用しないからな。

「寒い」

少し身震いをしてすべり落ちそうになった桜を、俺は慌てて抱きなおした。

「そんな薄着でいるから寒いんだぞ。風邪をひいたらどうするんだ」

少しでも温まるように、しっかりと抱きしめる。

腕の中で桜を壊してしまいそうで怖かった。

相変わらず、軽いな……。羽が生えてどこかに飛んでいきそうだ。

「痛いかな？」

足から脱げそうになっていたサンダルを、傷を刺激しないようにそつと脱がせてまとめて手に持ってる。

桜によく似合う、華奢なヒールのサンダルだった。

さつきこぼした涙みたいな小さな銀のしずくが、きらきらと揺れて光っている。

「これもあげるよ、お姉ちゃん。どうせ今日は店じまいしようとしてたところだ。あんたに似合う」

親父までが、照れくさそうに桜を甘やかした。

「ありがとう」

桜が嬉しそうに目を細めて花に顔をうずめた。

「綺麗……」

「顔に似合わず優しい彼氏でよかったなあ、あんた」

親父が余計なことを言い、桜がはにかんで長い睫を伏せた。

子どもみたいに幸せそうな顔で笑う桜を抱いたまま、夜の道を歩いた。

腕の中の桜が身体を動かすたび、優しく甘い香りがふわりと鼻腔をくすぐる。

腕に抱えた花束なのか、桜の香りか。

それを確かめたくなっている自分に気づき、俺は慌てて頭を振り上げ、前を見た。

？優しい夜と花束と

「ここにある会社で、宏章さんはお仕事してるの？ 凄い」

桜が目の前に高くそびえるビルを見上げて、嬉しそうに言った。

「ああ。去年から」

「前と同じお仕事なの？」

「基本的にはな。今ではIT関連の何でも屋だ」

三十歳手前で、この界限に自分のオフィスを持つことができたのは成功と言えるかも知れないが、これで終わるつもりはなかった。

俺は、俺の限界がどこにあるかを知りたいのだ。

おそらく、惚けてネジが緩まない限り、目の前の階段を上り続けようとする性分なのだと思う。

桜を抱きかかえたこの格好に驚いているだろうに、顔に出さず俺に挨拶したビルの守衛に目で合図し、地下の駐車場から上がってくる自分の車を待った。

桜が会社の車では嫌だと言い出しそうな気がしていたからだ。

運転手には、すでに連絡を取ってある。

車が、滑るように目の前にとまった。

メタリックグレーのBMW。

合理的で剛直なドイツ車が好きだった。

運転手に指示をして、桜と車の後部シートに乗った。

首に回された手を何とか引き剥がしたが、まるで俺が休みの日の颯のように、桜は俺から離れない。

俺にもたれかかったまま、少し不満そうに桜が言った。

「宏章さんが運転する車に乗りたかった。乗せてもらったの、久しぶりだから」

車は通りを走り始めていた。

「しかたないだろ。伶にすっかり飲まされた」

もちろん運転はできないが、しばらく街中を歩いたおかげで素面には戻っていた。

「軽井沢以来だな。お前が急に留学したから驚いたよ。行き先も言わずにいなくなるんだもん。今どこにいるんだ？」

桜はそれには答えず、俺からずっと目をそらした。

憂いを帯びた大人の女のような表情に、一瞬目を奪われる。以前はなかった表情だ。

女の子はこんなふうに変わっていくものなのだろうか。

しばらくすると、桜は窓の外を見て、嬉しそうに声を上げた。

「宏章さん、見て！ 綺麗……」

大通りにある桜並木の下を通っていた。

日本にしばらくいなかった桜に、この花をよく見せてやりたいと思ったのだ。

桜と同じ名の、儂く美しい花。

ライトに照らされた満開の桜の花が夜の街の景色に溶け込み、まるで別の世界のような。

運転手は、心得たように車の速度を緩めていた。

桜があんまり嬉しそうに見えているので、もっと喜ばせてやりたくなり、俺はふと思いついて言った。

「まだ時間が大丈夫なら、少し遠回りして帰るか」

「どこへ行くの？」

桜が、黒い瞳を楽しそうに輝かせて俺を見る。

「ついてからのお楽しみだな」

窓ガラスに一枚零れ落ちていた桜の花びらが風にあおられ、ふわりと飛んで視界から消えた。

？ 儂い桜

運転手に簡単な指示を出すと、車は週末で浮かれた六本木通りから溜め池方面に向かう。

花見のシーズンとはいえ、この時間なら車の流れを妨げられる事もなく、思ったより早く目的地に着きそうだった。

青山墓地も回ればよかっただろうか。

あの桜並木。

「首都高に入りますか」と聞かれ、俺は少し間を置いて「いや、いい」と答えた。

桜と一緒にいる時間を引き延ばしたいと思っている自分に気がついて驚く。

気を回して、混み合う首都高のルートを提案した運転手に苦笑した。

さまざまな色のライトに彩られた夜の街を抜け、広い駐車場に、車が静かに止まる。

窓から夜の風景を見つめている桜に声をかけた。

「着いたよ。降りて見るか？」

「抱いて行ってくれる？」

「しかたない」

ベテランの運転手が、ほんの少しだけからかうように口元をほころばせ、ドアを開けた。

俺がプライベートで女性を車に乗せたのが、よほどめずらしかったのだろう。

すぐに戻ると言い置いて、もう一度桜を抱き上げた。

ひっそりと静まった、夜の公園に足を踏み入れる。

花見の客が溢れる、昼間の喧騒が想像できないほどの静けさだった。

「ここ！ 昔、宏章さんによく連れてきてもらったわよね？ 高校の時、二人でボートに乗ったの、覚えてる。お堀から見る桜がほんとうに素晴らしかった……」

「お前にせがまれてボートをこぎ続けて、翌日腕が上がらなくなっ
た」

俺が言つと桜が笑う。

「なんども往復してくれたのよね。だって宏章さん、わき目も振らずに漕いでいるから、すぐに見所を通り過ぎちゃうんだもの。……
ああ！ なんて綺麗……」

桜が息を吞んで、目の前に広がる風景を見つめた。

明るい月の光に、優しくけぶるように浮かび上がった満開の桜。
夜の闇と月の光が、辺りを幻想的な空間に変えていた。

「見事なもんだ。まるでお前が来るのを待ってたみたいだよな。いつもならこの時期にこれほどの桜は見れないのに」

「私達二人だけで公園中の桜を独占してるみたい。宏章さん、上を見上げてみて」

腕の中の桜に言われて振り仰ぐと、幾重にも重なる桜の花の向こ

うに、柔らかな光を投げかける白く大きな月が見えている。
桜は俺の腕から身を翻すと、そっと地面に足を下ろした。

「冷たくて気持ちいい」

そう言って笑うと、低く枝を差し伸べた大きな桜の樹の下まで歩いて行って、俺を振り返る。

月明かりの中、ほっそりした身体に俺のジャケットをはおり、白い素足で地面に立っている儚い姿。

ジャケットの下、微かに光沢を帯びた薄いワンピースが、まるで素肌のように見えてドキツとした。

抱きしめた時の、あの感触が急に蘇る。

自分の鼓動が早くなっていることに気がついた。

まてよ、いったいどうしたって言うんだ。

なんで目が離せない？

「宏章さんはサクラが好き？」

子どものように無邪気な声で桜が聞いた。

この花が好きかと問われているのだ。

「……ああ。好きだよ……」

少し掠れた声で、俺はようやく答えた。
胸が高鳴っていた。

全身の血が、音を立てて流れている。

「私も……大好き……」

桜はまっすぐに俺を見て、ゆっくりと、囁くようにそう言った。
不思議な輝きのある黒い瞳と、艶やかな赤い唇。

少女から女に脱皮しかけている、神秘的な生き物が桜の樹の下で
微笑んでいる。

その美しさに息を呑んだ。

何かが俺の胸を鷲づかみにし、強く締めつける。

こんな気持ちはいつぶりだろう。

忘れかけていた甘美な苦しさ。

自分の心臓の鼓動が耳を塞ぐ。

俺は、まばたきすら忘れて桜を見つめていた。

目を離せと理性は言うのに、身体がいうことをきかない。

あたり一面に広がる薄紅色の花が、息をひそめて俺達を見つめて
いる。

桜はふわりと俺の元に歩いてくると、俺の首にほっそりした腕を
回した。

ジャケットを通して伝わる桜のしなやかな若い身体。

「足が冷たくなっちゃった。もう一度抱いて、宏章さん……」

まるで、まだ女を知らないガキのように、俺は身体を動かせずに
いた。

鼻腔を優しくくすぐる、甘く官能的な花の香り。

桜が濡れたような黒い瞳で、俺を見つめている。

しっとりとした赤い唇が、俺を誘うように動いた。

「宏章さん？」

抑えきれない欲望が沸きあがる。

目も眩むような、強烈な欲望。

「桜……」

気が付くと、夢中で桜をかき抱いていた。
柔らかな髪ごと顔を引き寄せ、そのまま冷たい頬に唇を触れる。
驚いたように俺の身体を手で押し返そうとする桜。

かまわず抱きしめ、滑らかな白い喉を舐めるようにキスでたどる。
華奢な背中をわざと強く片手で撫で下ろすと、桜が少し喘ぎ、顔を上向かせてのけぞった。

そのまま桜の唇を捕らえて分け入り、強引に舌を絡めとる。
おずおずと俺に応えようとする桜の初心なキスに内心戸惑ったが、その理由すら考えてやる余裕がないほど、俺の身体は高ぶっていた。
深いキスを繰り返しながらジャケットのボタンを外し、中に両手を滑り込ませてしなやかな身体をまさぐる。

まだ少女の面影を残す、美しい女の身体。
細い首からむき出しの肩を指でなぞり、薄い布の上から丸い胸の膨らみを手におさめる。

腕の中にいる桜の身体の甘美な感触に、我を忘れていた。
夢中で肩からストラップを滑らせ、柔らかく盛り上がった胸を覆う薄いレースのブラをぐつと押し下げる。

桜が大きく身体を振るわせた。
乱れた服から零れた白い胸がたまらない。
ふつくらとした、鮮やかな薄紅色の頂が俺を誘う。

胸を隠そうと身をよじる桜の腕を強く押さえて開かせ、その頂に舌先を触れた。

甘い、蜜の味。

全てが、俺を狂おしく駆り立てる。

「こんなところじゃいや……。宏章さん」

「気にするな。誰もいない」

俺から逃がさないよう、片手で桜の細い腰をしつかりと捕らえる。もう一方の手で美しく盛り上がる膨らみを掴み込んだ。

その手触りの心地よさに恍惚としながら、先端の突起を親指で刺激する。

「でも……」

「ああ、わかってる……」

そう言いながらも俺は愛撫の手を止めず、そするように立ち上がってきた小さな突起ごと桜の胸を口中にほおばった。

舌を押し返す張り詰めた胸の感触。

吸い上げると桜がびくと震え、その反応にますます興奮する。

「宏章さん、お願い……」

甘い突起を夢中で味わっていた俺は、桜が無抵抗で、ただ俺のなすがままになっていることにしばらく気がつかずにいた。

もう一度唇にキスをしようとようやく顔を上げて桜を見、俺は驚いて身体の動きを止めた。

桜は大きな目に一杯涙をためて、羞恥に身体を震わせていた。

まるで思春期の幼い少女のように、傷ついた表情。

身体を離れた途端、桜はむき出しになった胸を恥ずかしそうに手で覆い隠し、うつむいた。

まだ男との経験がないのだと、瞬時に理解した。
なんてことだ。

頭の中に吹き荒れていた熱情が、一気におさまっていくと同時に、激しい後悔が俺を襲う。

いったい俺は何をしてたんだ？

家庭のある身で、まだ二十歳にもならない、何も知らない少女を相手に。

しかも、ずっと小さな妹のように思ってきた桜だ。
桜はいくつも涙を零しながら、やっと言った。

「小さな頃からずっと好きだったの。宏章さんは私の気持ちをわかってくれていたから、こうしたのよね？」

思いがけない言葉に絶句してしまい、反射的に、知らなかったと謝罪の言葉が口をついて出るところだった。

俺を好きだった？

兄ではなく、男として見ていたということか？

必死に動揺を押さえ、冷静になれと自分に言い聞かせる。

へたに謝ったら返って傷つける。

久しぶりに見た桜の美しさに気持ちが高ぶって、つい抱きたくなつたなんてもつてのほかだ。

——お前以外は、誰が見てもわかる状況だったろうよ——。

伶の言葉の意味が始めてわかった。

俺は、必死で桜に言うべき言葉を捜しながら乱れた服を直してやり、怖がらせないようにそっと引き寄せ抱きしめた。

顔を見られては、俺の気持ちを悟られてしまうからだ。

「……可愛いと思ってた」

これは嘘ではない。

慎重に言葉を選ぶ。

「ずっと可愛いと思ってたよ。大切な」

妹のように、という言葉を読み込む。

こんなことをしておきながら妹だつて？
俺は最低野郎だ。

「大切な桜だ。お前があんまり綺麗で魅力的なものだから、抱きしめずにいられなかった。無理やりこんなことをしてしまつてごめん。もうしないから、泣かないでくれ」

肝心な気持ちをぼかした曖昧な答え。

とても言い訳になっているとは思えなかった。

自分の浅はかさを呪う。

桜は俺の胸に顔をうずめてひっそりと泣いていたが、やがて小さく呟いた。

「うっん。やめて欲しくないの。宏章さんにそうして欲しかったの」

涙をこぼしながら、俺に抱かれたと言っていいのか？

意外な反応に、さらに戸惑う。

「宏章さんに……私は……」

それ以上の言葉を口に出せるほど大人ではない。

恥ずかしい思いをさせないように、桜の頭を引き寄せてそつと撫でる。

「もういいよ。無理に言わなくていい」

「……宏章さんを思い出したいの」

「思い出す？ 俺はお前の目の前にいるだろう？」

不思議なことを言うと思った。

きつと、動揺しているのだろう。

落ち着かせようと抱きしめている俺に、しばらくしてから桜が言った。

「宏章さんに抱かれた時のことを思い出したいの」

聞き取れないほどの囁き。

「初めての時のこと」

声が震えている。

それから桜は、思い切ったように俺の顔を見上げた。

何かに怯えていることに、すぐに気がついた。

「あのビルで私を抱いたのは宏章さんよね？ 四年前の春、宏章さんが事務所を持っていたあの小さな古いビルの部屋で」

初めて？

俺は混乱して、言葉を完全に失った。

まさか、俺が高校生の桜の処女を奪ったと言ってるんじゃないよな。

もちろん、心当たりはまったくなかった。

桜が何を言っているのか把握しようと自分を落ち着かせ、頭を整理する。

小さな古いビルということは、今のビルに移る前ではない。

あそこは小さかったが、古くはなかった。

あの、池袋のビルの事か？

仕事の手がかりは掴んでいたが、まだ経営が上手く行っていなかった。

治安の悪い界隈の、うら寂れた古い雑居ビル。

桜の両親は長く帰らず、彼女を妹のように可愛がっていた従兄妹の伶も遠い地にいた。

寂しがっていた桜は、学校帰りにいつも俺の事務所に遊びに来ていたのだ。

どんなに来るなと言いつつ含めてもだめだった。

アルバイトの大学生二人は、毎日来るわけではない。

俺がいないと一人でドアの前に待っているから、合鍵を渡していたのだ。

一目見て、山の手育ちだとわかる桜には、似つかわしくないあの通り。

恐ろしい想像が頭をかすめた。

路地にたまる男どもが、舐めるように桜を見ていた――。

「いつものように鍵を開けて事務所に入ろうとしたら、後ろから強く抱きしめられたの。それきり何もわからなくなって……。気がついたら事務所のソファにブランケットをかけて眠っていて、宏章さんが机に向かってお仕事してた」

頭を殴りつけられたようなショックで、言葉が出てこなかった。

桜は、恐らく薬を嗅がされたのだ。

「ブランケットの中の服が……。服が乱れてて……。身体が……。痛くて……。私、恥ずかしくて宏章さんの顔を見れずに、そのまま帰ったの。呼び止められたのに、逃げるように走って帰った。

宏章さん、そのことを怒っているんじゃないかと思って、それから何も聞けなくて」

桜を抱きしめる手に力がこもっていた。

桜を犯した男に対する怒りで身体が震えるのを、抑えることができない。

「どうして怒っていると思った？」

できる限り声を落ち着かせ、俺にしがみつく桜の髪を優しく撫でながら聞いた。

「あの頃の宏章さん、いつもと違ってた。話しかけても答えてくれなかったり、厳しい顔で考え事してる時もあった。だからきつとあるときもいらしてて、あんなふうに私を抱いたんだと思ったの。宏章さん、お仕事で急がしいのに私がうるさく付きまとうからだから……」

当時の俺は、確かに、ナイフのようにぴりぴりとしていた。

心血を注いで開発した新しいシステムが、俺の交渉ミスから二束三文で企業の手に移ってしまった時だ。

ようやくつかみかけたと思った成功が水の泡と消え、自暴自棄になつていたのだ。

先に事務所に来ていた桜が、珍しくソファで眠っていたことがあったのを思い出した。

ブランケットをかけていたから、まったくわからずにいた。

いや、注意して見てやれば、すぐにいつもと桜の様子が違うことに気がついたはずだ。

飢えた野良犬のような奴らが、いつもどんな目で桜を見ていたかわかっていたはずなのに。

あの頃は苦しさのあまり、仕事を続けているのがやっとだった。俺はなんということをしてしまったのだろう。

桜……。

「そのあと、いつもちゃんと来る生理が遅れたの。お腹が凄く痛くて、たくさん出血した。怖くて誰にも言えなくて、でも血が止まら

なくて。和也兄さんにだけ話したの。和也兄さんの病院で調べてもらったけど、何も心配することないって私の肩を抱いてそう言ってくれた。いろいろと気持ちが不安定だったから、ただ生理が遅れただけだよって」

桜の身体が小刻みに震えている。

聞いていられないほど辛かった。

だが、全てを聞かなくてはならない。

それが俺にできる、せめてもの償いだ。

桜は掠れた声で囁くように言った。

「赤ちゃんが……。赤ちゃんができたのかと思って……。友達が、そういう流産もあるって話してたの聞いたことがあったから。私、宏章さんの赤ちゃんが知らずに死んじゃったら、生きていけないと思った」

桜はそう言つて、こらえていた苦しみを吐き出すように泣いた。

伶の兄はそれがごく初期の流産だと知っていて、桜の心に傷を残さないためにそう答えたのだろう。

残酷な事実を告げたら、桜は粉々に打ち砕かれてしまう。

それなのに、俺は桜がこれほどまでに俺に想いを寄せてくれていたことすら、気づかずにいたのだ。

自分に対する怒りと無念さで、きつく目を閉じる。

「桜に謝らなくちゃいけないと、ずっと思っていたんだ」

俺は桜を抱きしめたまま言った。

どうか、どうか俺だと信じていてくれ。

「あの日お前を抱いたのは俺だよ。お前が可愛いくて、どうしても
気持を抑えられなかった。だけど、無理矢理思いを遂げた自分が許
せなかったんだ。俺は同棲してたし、桜にはきつとふさわしい相手
が現れると……」

酷い男だと思われてよかった。

そう思ってもらえれば、どれほどいいか。

だが、桜はその後もずっと、何も言わないまま俺を慕い続けてい
てくれたのだ。

「よかった……。やっぱり宏章さんだったのね……。怖かったの。
もしも違ってたらって。ずっと怖かった……」

相手が俺ならば、全て許すというのか。

ずっと苦しんできたことも、自分を踏みにじった行為も全て。

ひたむきな想いに目頭が熱くなり、思わず上を見上げた。

綺麗な桜の花が、白く月光に透けている。

桜をもう一度汚そうとしていた自分を許すことは出来ないだろう。
俺はその男たちと同じなのだ。

「恐ろしい夢を見るの……」

桜が恐怖を押し殺すように、そっと口に出した。

「あの日からずっと……」

なんとか言葉を搾り出そうとするが、怯えて声にならない。

俺の腕の中で、桜の身体がガタガタと震えだした。

酷いトラウマを抱えているのは明らかだった。

その姿があまりにも痛々しく、どうしてやることもできない自分

への怒りで歯噛みをする。

俺は辛抱強く桜の言葉を待った。

桜がようやく口を開く。

途切れ途切れに、掠れた声で。

「知らない男の人が、泣き叫んでる私を無理やり踏みに行っている夢を見る。ほかに何人も男の人がいて、皆で泣いてる私を笑っているの。でも、あれはただの夢よね……？」

薬で朦朧としていたために、現実とも悪夢ともつかぬ記憶になっているのだろう。

自分たちの汚い欲望を遂げた後、混乱させておくためにまた眠らせたのだ。

狡猾な男たちの卑怯な手段。

だが、そうされなければ、桜は今、ここにいなかったかもしれない。

残酷な記憶から逃れるために、最悪の結果を選んだかもしれないのだ。

腕の中の桜の儚さが、俺の胸を締め付ける。

軽井沢の別荘で、俺を待って泣いていた桜を思い出した。

あの頃俺は、結婚を控え、思春期の桜が事務所を訪ねてこなかった理由を深刻に考えることもなかった。

颯を宿した愛美と俺が式を上げた教会で、涙ぐみながらも俺に笑顔を見せて見せた桜のいじらしさが、痛いほど胸にしみる。

愛美が渡したブーケを胸に抱いていた、桜の姿。

桜は俺が幸せな家庭を築いていくところをずっと見ていたのだ。留学を決め、何も言わずにこの地から離れるまで。

迎えに行った別荘で、桜と一晩夜を明かした。

俺の目の前で、着ていたものを脱ごうとした桜。

思春期特有の気の迷いだと、軽くかわすことを迷いもしなかった。桜はあの日の相手が俺だということを、どうしても確かめたかったのだろう。

心の底にある疑いと恐怖を消し去るために。

「思い出させて……。お願い、宏章さん。もう夜中に泣きながら目を覚ますのはいや」

桜は肩を震わせて泣いた。

あれからずっとこうして苦しんでいたのだ。

「俺がお前を抱いているんだ。それはただの悪い夢に決まってるだろ？ 関係ない男のことは考えるな。俺が忘れさせてやる」

伶は全て知っていて、桜を俺に託したのだ。

信じていると奴は言った。

俺が桜を長い悪夢から救うんだな？ 伶――。

「もう一度、初めての日をやり直そう。桜が全部思い出せるように」

きつく桜を抱きしめ、俺は言った。

家で待っている愛美の顔が浮かんた。

電話を入れてから随分経つ。

きつと心配して待っているはずだ。

俺は愛美を無理やり頭から振り払い、桜を抱きあげた。

今、桜の前で愛美に連絡を取ることはできない。

車に桜を乗せ、シンプルだが上質の部屋を用意するホテルに向かわせた。

「着いたら、車を置いていってくれ」と言う俺の言葉に、運転手が

承知しましたと頷いた。

携帯を、ずっと意識していた。

これを知ったら、愛美はどう思うだろう。

永久に愛美を失ってしまうかもしれない。

それでも、引き返すことは出来なかった。

公園であして桜に触れてしまった後では、なおさらだ。

桜がその時以来、男を恐れていることは間違いなかった。

いつまでも、過去の苦しみの中に桜を置いておくことはできない。

桜を抱いたまま、ホテルの部屋のドアを押す。

キーを差し込むと自動的に部屋を照らす柔らかな明かりの中、ダブルベッドの 真っ白なシーツのうえに桜をそつと横たえた。

途中で買ってきた小さな箱を、さりげなく置く。

わざと桜に見せるように、そうしたのだ。

俺は包みを開けながら、できるだけさりとった。

「俺は昔から用心深いんだよ。もちろん、桜をはじめて抱いた時にもね。だから、桜は妊娠も流産もしていない。わかるだろ？ するはずがないんだ」

桜がほつと小さくため息をついたのがわかる。

ベッドに腰掛け、そのまま桜にゆつくりと覆いかぶさった。

目を閉じた桜に丁寧にキスを繰り返しながら、俺は片手で携帯の

電源を切って、サイドテーブルの上に置いた。

笑って俺を見ている颯の写真が消えていく。

優しい愛美の笑顔を振り切るように目を閉じる。

俺は覚悟を決めると、枕もとの明かりを消した。

？花びらとアラーム

夜明け近く、車のハンドルを握る俺の横で、桜は白い花束を抱きしめたまま、ぐっすりと眠っていた。

穏やかな表情で、あどけない子どものように。

部屋を後にするとき、桜は笑顔でありがとうと俺に言った。

澄んだ大きな目に、綺麗な涙をためて。

胸に秘めた想いを終わらせる儀式。

今夜の記憶はそのまま桜の空白の過去に埋め込まれ、俺たちは二度とそれを繰り返すことはない。

桜は、伶のマンションに送っていった。

伶はすぐにドアを開け、「お帰り、桜」と言って部屋の中に桜だけを招き入れた。

眠そうにしている桜にお休みと言い、伶に花束を渡す。

俺と伶は何も話さず、目も合わせなかった。

それでもお互いの気持がわかっていたから。

帰りの車の中、俺の腕の中にいた桜の儂さを思う。

まだあたりに微かに残る清楚な花の香りが、俺の胸を締め付けた。

桜はいい子だ。

いつかあいつを心から愛する男が現れ、俺がもう一度作り直した過去すら優しく葬りさる日がきつと来る。

家へ帰ると、明かりは消えていた。

寢室のドアをそっと開けると、ベッドに眠る愛美の姿が見える。

「宏章さん？」

愛美が、気配に気づいて身体を起こす。

波打つ長い髪が、柔らかなオフホワイトのネグリジェの肩にふわりとかかっている。

愛美は俺を見るとベッドから降り、そっと近づいて優しく囁いた。

「お帰りなさい。連絡がないから心配したわ……」

颯が眠るベッドを振り返り、それから俺を見上げて、穏やかに微笑む。

「颯は早く眠ったから、物音で目を覚ましちゃうかもしれないわ。着替えをリビングに持っていくわね。お腹はすかない？ 何か食べるものを作りましょうか」

「いや、いい」

俺は廊下に足を踏み出すと、振り返って愛美を見た。
どんな時でも俺のそばにいてくれた、掛け替えのない愛しい妻。

「……抱いていいか？」

俺はうつむいて愛美に言った。

愛美をこの手にかき抱きたかった。

だが、自分にはもうそんな資格がないのかもしれない。
この先もずっと。

「どうしたの？ 宏章さん。もちろんよ……」

立ち尽くす俺に優しくそう言うと、愛美はしなやかな腕を伸ばし、

俺を抱きしめて柔らかな身体を押し付けてきた。

慣れ親しんだほのかな香りを嗅ぐと、切なさや安堵で胸が一杯になり、言葉もないままにきつく愛美を抱きしめる。

俺の気が済むまで、愛美はずっと腕の中に抱かれたままでいられた。

ようやく気持が落ち着いて、リビングの椅子に座ると、愛美が薄めに作ったウイスキーのグラスを俺に手渡した。

「飲みたそうな顔してたか？」

「ええ」

愛美が笑った。

いつも俺の気持を先回りして、ともしればめちやくちやに階段を登り続けてしまう俺に寄り添い、支えてくれる、かけがえのない妻。俺の人生の宝だ。

「宏章さん、ジャケットを脱いだら？ 休まらないでしょう」

いつものように俺からジャケットを脱がせ、ハンガーにかけるために立ち上がった愛美が、なぜかそのまま背を向けて立っている。

その後姿を見たらたまらなく抱きたくなり、俺は立ち上がって愛美を後ろから抱きしめた。

愛美を抱いて、安心したかったのだ。

「眠いか？」

ほっそりとした首筋にキスしながら愛美に囁く。
吸い付くようにきめの細かい美しい肌。

「いいえ」

あまり聞いたことのない、単調な声のトーンで愛美が答えた。

俺のジャケットを持ったままの愛美を、それごと抱き上げると、毛足の長い絨毯の上に横たえた。

愛美を抱きしめていると、緊張で張り詰めた身体から疲れが溶け出していくようだ。

唇にキスをしようとした瞬間、愛美がふいと横を向く。

これも、めずらしいことだ。

仕方がないからそのまま頬にキスし、髪を撫でながら耳と首筋を愛撫していると、愛美が落ち着いた声で言った。

「宏章さん、この中には四個しかないけど、こういうのって十二個入っているもののなの？」

さっきまでのことが、すでに遠い夢のように感じていた俺は、愛美のネグリジエにたくさん付いた小さなボタンを外すのに夢中で、何を言われているのかにも気がつかなかった。

「何がーダースだって？　なあ愛美、これも似合ってると思うけど、もっとこう、すぐに脱ぎやすいデザインもいいと思うぞ」

「…………装用感を忘れるほどナチュラルな…………」

愛美がつぶやく言葉も、高ぶり始めた俺の耳にはほとんど入らない。

面倒すぎるボタンはあきらめて、ネグリジエの裾からくるりと胸元まで引っ張りあげよう。

そう思って身体を起こし、愛美の足のほうに手を伸ばした俺の目

の前に、どこかで見たような金色の箱が見えた。

愛美が横たわったまま、無言でその箱の中を見ている。

「うわーっ！」

あまりの動揺で、思わず叫んでいた。

なぜだ？　なんだって、ここにこんなものが！

ホテルの部屋に捨てたような気がしていた。

それとも、外で捨てようと思ってポケットに入れたんだっけ？

まったく思い出せない。

愛美は絨毯に身体を起こすと、俺に顔を向け、綺麗な眉を片方、わずかに上げた。

いつもと全然違っていない。

ただ笑っていないだけだ。

俺を見て優しく笑っていない愛美を見たのは、いつ振りだっけ。

いや、そもそもこんな顔を見た記憶がない。

「まま、まさか十二個なんて！　ぐごご、五個入りだよ。これでも少ないほうを選んで……」

墓穴だ。

全身から、どつと汗が吹き出す。

自分が床に正座していることに気がついた。

「ばら売りはないの？」

愛美、こんな時に冗談言わないでくれ。

泣き笑いになりそうだ。

「いやその。……あるかも」

ばら売りはあった。

一個入りが確かにあった。それを横目で見ながら、箱買いしたんだ。

はつきり認めるが、スケベ心だ。

ああ、あの時ばら売りを買っておけば……。

愛美の目線の先に、『薄さを極めた、最高にリアルな密着感』という能書きの文字を見つけ、俺の目は完全に泳いだ。

「だだだだ、誰から！　そ、そう、伶が面白半分俺のジャケットに入れたんだな！　ほら、あいつ冗談好きだから。……はは。……はははは」

愛美が俺のシャツに手を伸ばし、胸ポケットからもうひとつ小さな袋を取り出して俺を見た。

「封を開けて中を取り出した殻も、冗談で入れられたってこと？」

使用済みの殻まで持ち帰るなんて、俺はマニアか！

情けなくも正直なオスの本能がそうさせたのか？

もう、言葉がまったく出てこない。

「つ、つまり、つまりそれはその……」

五個あっても、ひとつしか使わなかったんだぞ、愛美。えらいと思わないか？

あの桜相手にたった一個は、清いとすらいえるじゃないか。

俺以外の男なら、全部使ってる。いや、全部使った上に買い足してるぞ。間違いない！

……などと言えるはずがない。
いつそ角を生やして怒り狂うか、床に突っ伏して泣いてくれ、愛美。

「寝るわ。おやすみなさい」

愛美はそう言って立ち上がった。俺にくるりと背を向ける。
ドアがパタンと閉まり、俺は広いリビングにぽつんと取り残された。

床に両手を突き、がっくりとうなだれる。

ここでおやすみなさいってことは、今日はもう口をきかないってことだよな。

当然だ……。

「部屋に入ってくるなってことか」

回り道して、ようやく認めたくない事実突き当たる。
長い長い溜め息が出た。

リビングに捨てられてしまった俺は、のろのろと立ち上がり、サイドボードから新しいブランデーを持ってきた。

自分への罰にこれをラッパ飲みしよう。

瓶の口をあけ、琥珀の酒を飲めるだけ一気に飲み下す。
まるで殴りつけられたように、すぐに強烈な酔いが回った。

床に座って足を投げ出したまま、ソファに寄りかかる。

苦い酒。

その時、ジャケットの中で俺の携帯がけたたましくなり始めた。
勇ましい、ガオガオレンジャーのテーマ曲。

颯にねだられて、朝のアラーム音に設定してあるのだ。
てことは五時半か。朝だな……。

俺はアラームを止めようと、携帯を取り出した。

俺を、笑って見ている颯の顔。

「ちゃんと目を覚ませってことだな。忠告ありがとう。本当にそうするよ」

颯の写真に俺は言った。

そうするから、明日は愛美の横で目を覚ましたいって、ママに伝えてくれよ、颯。

もう、愛美が恋しいんだよ……。

俺の長い夜は、大量のブランデーとともに終わりを告げたのだった。

？サッカーボールと涙

シャワーの後、まだ濡れたままの頭で車庫をのぞくと、愛美の車はそのままだった

運転は得意ではない愛美だから、車で出たのなら近くにいるはずだと期待をかけていた。

もつと遠くへ行つたのだろうか。

手にした携帯を見つめる。

むやみに連絡を取つたら、愛美がますます遠くに逃げていつてしまつような気がした。

いや、それより、愛美に愛想を尽かされたことを聞かされるのが怖いのだ。

家にいても落ち込むだけなので、俺はサッカーボールを持って車を出し、颯を連れて川べりに出かけた。

二日続きの晴天で、この辺りの桜は一斉に花びらを散らしはじめていた。

終わりなく舞い落ちる、美しい桜の花びら。

道端に吹き寄せられた柔らかなそれは、春の風が吹くたびふわりと舞い上がるのだった。

「パパ、みて！ きえいね。ママ好きなお花」

窓に張り付いて外の景色を見ながら、大喜びする颯の言葉に胸を突かれた。

愛美は桜の花が好きだった。

桜雲が、降るように美しい花びらを散らす中、時間を忘れて静かにたたずむ愛美の姿を思い出す。

昔はこの季節が来るたび、俺は愛美を連れて桜を見たのだ。

忙しさに取り紛れ、もう何年も一緒に桜を見ていないことに気がついた。

「……ここで降りて、川原でサッカーをするか、颯」

車を止め、沈み込む気持ちをなんとか上向かせ、颯に聞く。

「うん！」

満面の笑顔を向ける颯の頭を撫で、エンジンを切ろうとすると、カーナビから聞き覚えのある男の声が聞こえてきた。

画面では、青いユニフォームの背の高い男がボールを蹴る姿が、アップに切り替わるところだった。

「ドイツでの二年間で、プレースタイルに冷静さと強靱さが増したとの監督の評価ですが」

インタビュアーの向けたマイクに、少しのびかけた黒髪に落ちついた表情の男が淡々と答える。

「少しでもチームの勝利に貢献できるよう、努力します」

「ファンの期待も高まっています。頑張ってください。右足指の骨折から復帰。松岡慎吾さんでした」

松岡だった。

松岡は、高校卒業後に練習生契約からプロになり、血の滲むような努力でレギュラーを獲得した。

不調に陥った二年前、単身でドイツに修行に渡り、帰国してからさらに評価が高まった。

遅咲きだが、実力が確実に培われた、揺るぎない選手。
無鉄砲な十代を過ぎ、挫折と努力を繰り返した十年は、風貌すら
精悍に変えている。

いい男になったものだなと思うと同時に、また不安が湧き上がる。
松岡は、長く愛美を好きだったのだ。

俺ですら、奴が押し隠した気持ちに気が付くほどに。
交際範囲がそれほど広くない愛美に、もし何かあるとしたら、知
り合う相手は限られているはずだ。

車から降りる俺の脳裏に、電話のベル音が蘇る。
あの時、松岡との会話にあった、不自然な空気。

奴はなぜ、今日に限って自宅に電話をかけてきたのだろう。
俺の居場所を知りたかったからではないのか。

颯に引つ張られるまで、その場に立ちつくしていたことにも気が
つかなかった。

俺は颯と目線が合う様にしゃがみ、不安を懸命に抑えながら聞い
た。

「颯、ママはひとりでお出かけしたか？」

いつものように愛美と名前で呼ばず、ママと呼んだ。

もう、俺の妻としてではなく、颯の母としてでもいいからそばに
戻ってきてほしかったのだ。

「ううん」

颯は首を振ると、無邪気に続けた。

「ママ、お荷物持ってサッカーのおじちゃんとブーブーで行った」

重い杭を打ち込まれたような衝撃だった。

愛美は今、俺ではない男という。

ようやく言葉を押し出した。

聞きたくない答えを聞くために。

「テレビで見るサッカーのおじちゃんか？」

「うん！ パパいないとき、颯のおうち来る」

「そうか……」

立ち上がる気力がなかった。

身体の中から、何かがゆっくり流れ出していく。

俺の背におぶさってきた颯にせがまれ、力を振り絞ってようやく立ち上がる。

愛美は、昨日の俺の不始末を、出て行く切っ掛けにしたのだろう。
自業自得。

その通りだ。

広い川原の芝の上で颯とボールを蹴って遊びながら、愛美はこいつも連れて行ってしまっただろうかとぼんやり考えた。

母性の強い愛美が、颯を置いて出て行くはずがない。

颯の成長をずっと綴った日記。

颯を抱きしめ、愛しそうに見つめる表情。

颯を連れ戻しに、一度は帰ってくるつもりなのだろう。

芝生の上でボールを蹴る颯が、上機嫌で笑い声をあげている。
颯は、サッカー遊びが大好きだった。

こんなに小さいのに、生意気にドリブルもどきもして見せる。サッカーじゃもう、あいつにはとてもかなわない。

昔は対等に試合してたこともあったのにな……。

このボールも奴が颯に持ってきたのだと、今ならわかる。

最新型のボールなど、いくらでも手にはいる立場だ。

愛美が買ったのではない。

誰かが颯に与えているのだと、何故気がつかなかったのだろう。子ども部屋に溢れるおもちゃを見れば、颯が送り主に愛されているのは一目瞭然だった。

松岡なら、俺より数倍もいい親父になりそうだ。

奴は下町育ちで、明るく気のいい両親と仲のいい弟達がいる。

試合には、家族が町内ぐるみで応援に来るような、人情の溢れた暖かい環境に育ったのだ。

颯は大好きなサッカーがよく出来る親父を、尊敬するに違いない。俺は親父が子どもにどう接するのかすらよくわからない家庭に育っているから、きっと家族を持つなんて、もともと無理な話なんだ。

いつの間にか、俺はあれ程軽蔑していた親父とそっくりな人生を歩んでいる。

仕事に没頭し、家庭をかえりみなかった親父。

妻ではない女性と関係を持ち、お袋を傷つけて、夫婦の間に修復不可能な傷をつけた親父。

そういえば、幼い頃から自分を慕ってくれた女性と関係したことまで、まったく同じだ。

俺は、自嘲気味に笑った。

歴史は繰り返す。

俺も颯に軽蔑され、疎まれる日が来るのだろうか。

「どうしたの？ パパ」

春先の、まだ冷たい芝生に寝転んでいたら、颯が飛んできて俺の腹の上にうつぶせになった。

「おふね、ゆらゆら、して」

そう言われたら、揺らしてやらなきゃならない。

俺は寝転んだまま颯を腕で抱き、ゆっくりと左右に揺らしながらひとり言のようにつぶやいた。

「なあ、颯。パパとママ、どっちが好きだ？」

答えなんか、聞かなくてもわかっていた。

愛美に決まってる。

俺が好きだと答えてくれれば、時々はこのつに会わせてもらえるかもしれないのにな……。

その時には、愛美の姿もほんの少しは見れることがあるかもしれない。

颯は俺の腹を這い上がり、目の前までよじ登ってくると黒い大きな目で俺を見た。

「パパとママ」

俺は颯に言った。

「聞いていることがわからないのか？ パパとママ、どっちが好きかって聞いているんだぞ。もし、どっちがいなくなるとしたら」

颯が答える。

「パパとママ」

「どっちかがいなくなるんだぞ！」

知らずに口調を強めてた。

颯はちよつとだけ口を尖らせて俺を見た。

泣くのを我慢している時の顔だ。

「パパとママ！」

突然、颯の目に大粒の涙が湧き上がり、俺の顔にぼたぼたと零れ落ちてきた。

「颯、パパとママ好きもん！」

それから颯はおいおい泣き出して、俺に力いっぱいしがみついた。

「いなくなあないもん。パパとママも颯というもん！」

「颯……」

だめだ。

俺も目頭が熱くなってきた。

昨日からどうしたってんだ。

人生で数えるほどしか泣いたことがないのに、俺もやきがまわったかな。

「ごめんな」

こんな不器用な親父で、ごめんな、颯。

俺は颯の柔らかい髪を撫で、目をしばたいて、白い雲が薄く霞む春の空を見上げた。

もし愛美と颯を一目でも見る事ができなくなったら、俺はどうやって生きていけばいいのだろう。

一ヶ月に一度、いや年に一度でいいからこいつに会わせてもらおう。

遠くから姿を見せてもらうだけでもいい。

俺は愛美が帰ってきたら、そう頼もうと心に決めた。

愛美が俺の顔など見たくないなら、颯から時々、愛美の話を聞かせてもらうのは許されるかな……。

「パパ、痛いのか？」

颯はあとからあとから涙を零してしゃくりあげながら、俺の頬に小さな手を触れた。

自分も泣いているくせに、俺の涙を指でぬぐってる。

「痛いのか？」

「ああ、芝生が目に入った」

俺を一生懸命撫でてくれる颯を、両腕で抱きしめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2869ba/>

スウィング・モビール

2012年1月13日19時52分発行